

大学生の地域活性化活動が地域に与える効果の一考察

—江部乙地域における取り組み事例から—

A consideration of the effects of university students' regional revitalization activities in Ebeots

舛 井 雄 一
Yuichi MASUI

1. はじめに

本稿では、國學院大學北海道短期大学の学生によって行われている滝川市江部乙地域での地域活性化活動を取り上げる。大学生による江部乙地域での地域活性化活動は2013年より始まったもので、國學院大學北海道短期大学の舛井ゼミの学生と、江部乙地域を活性化したいという想いをもつ地域の人びとが協働で地域活動を行っている。地域活動については、ゼミの学習の一環として行っているが学生主体で実施していることが特徴である。

江部乙地域での地域活動はゼミでの取り組みであり、基本的には学生たちの教育の視点から行われているものである。長年にわたり地域の人びとには教育的観点での活動であるということを理解して頂き、学生の成長の機会を提供するために尽力して頂いた。しかし、共に活動をしている地域の人びとにとってみると、学生の成長も大事ではあるが、江部乙地域の活性化もあわせて重要な視点であると思われる。

上記の視点を踏まえ、本稿では滝川市江部乙地域での地域活動の取り組みを事例として、その活動の詳細について述べたうえで大学生の地域活性化活動が地域に与える効果を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究の検討

ここでは上記の目的を検討するにあたり、大学生による地域活性化活動に関する先行研究について概観する。2006年に改正された教育基本法において、第7条に「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を追究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものである」と定義されたように、従来考えられてきた研究、教育に続く大学の第三の役割として地域貢献が位置付けられるようになった。それに呼応するように、大学と地域が連携して行われる地

域づくりの研究も盛んに行われるようになり、多くの知見が蓄積されつつある。

大学生が地域と関わりながら地域づくりの活動を行った初期の事例としては、全国的に広がりを見せたまちなか研究室の嚆矢となった1997年、兵庫県三田市中心市街に設置された「ほんまちラボ」の事例（片寄2001, 2002）および1998年に岐阜県大垣市に設置された「マイスター倶楽部」の事例（鈴木2004, 小川2018）などがある。また、水野（2004）では、商店街と連携し空き店舗を活用したまちづくりカフェの初期の事例で2002年にスタートした「マイルポスト・プロジェクト」の特徴が詳細に記述され、継続性や動機付けなどの課題克服のためにどのような取組を行っているかを紹介しながら、学生まちづくり活動の展望について検討している。ならびに古川（2011）では、2005年に活動を開始した「香川大学直島地域活性化プロジェクト」の活動が紹介され、その教育の視点として、実践的な経営教育の手法開発と学生の地域活性化への理解、また社会的視点として経済的自立モデルの提示、学生の地域活動への参加という効果が得られたことを明らかにしている。これらの初期の先駆的な活動事例は現在、多くの大学生による地域づくりの活動モデルとなっている。

その後、大学生による地域づくりの活動は増加し、その事例報告については枚挙に暇がないが、大学において教育の一環として取り込まれる地域づくりの活動は、PBL¹などアクティブラーニング²の重要性が叫ばれていることもあり、その教育的な効果についての関心が高まっている。それと同時に地域と連携して地域づくりの活動をする以上、その活動が地域にとって有用な効果を有するのか否かということについても大きな関心を持たれてきた。

上記のうち教育効果に関するものとして、青木等（2020）は、産官学連携によるPBLの教育効果を検証し、PBLにより、チームワーク、意思決定とコミュニケーション、考え抜く力、実行力と効力感の点で効果を確認できたこと、PBLが成功するためには、目的の共有、学生の主体的な取り組みをファシリテートする教員や関係者のサポートなどの一定の条件が必要であることを確認できたこと、さらにルーブリック評価の導入等により客観性のある学習成果の評価法の確立が課題であることを指摘している。また、舛井（2019）では、正課外の取組である地域活性化イベントの企画・運営というPBLを通じて学生たちの社会人基礎力

¹ PBLとは、problem based learningあるいはproject based learningの略であり、前者は課題解決型学習、後者はプロジェクト型学習といわれ、共に現実世界の問題解決に学生が協働して主体的に取り組むことを通じて問題解決能力の育成を図る教育法である（溝上・成田2016）。

² アクティブラーニングとは「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。（中央教育審議会2012）

についての自己評価が高まることを明らかにしている。

大学、あるいは大学生が行う域学連携プロジェクトの持つ地域に対する効果について、飯盛（2012）では、地域づくりを成功に導くには、①地域資源の発見、再認識、②人や組織同士のつながりの再構築、意味づけ、価値観の共有、③資源の戦略的展開、という「資源化プロセス」を打ち立て、創発（予期しない何らかのいい活動）をもたらすことが肝要であることを指摘したうえで、大学は、この資源化プロセスを効果的に機能させることに対し大いに役立つと考察している。佐々木（2022）は、岡山市の魅力を大学生がYouTubeを通じて発信するというPBLを実施した事例を報告し、YouTubeの再生回数、関係者からの評価、学生の岡山市に対する愛着度の深まりなどから、この活動が、岡山市の地域活性化への貢献に一定の成果があったこと、さらにその成果が学生のデジタル機器の習熟度と動画制作アプリの進化、地域活性化に対する意識の高いゼミ生の活動、学生のアイデアの尊重、担当教員の関係者との信頼関係の構築、学生の金銭的負担の削減の結果であることを明らかにしている。ならびに、上野山等（2020）でも、和歌山県有田郡広川町津木地区における和歌山大学観光学部地域インターンシップの取り組みから、地域にもたらされた変化として、①地域の新たな担い手の獲得、②地域におけるコミュニケーションの活性化、③活動へのモチベーションの向上、という3つの変化があったことを明らかにしている³。

こうした地域活性化を目的とした教育活動は、その目標が曖昧であること、成果を出すには長期間必要であること、行政の強いサポートが必要であること、地元の主体性を引き出す必要があること、そしてその活動を地元で継承する必要があることなど、学習環境を整え、長期間実施し、成果を出すことが非常に難しい（見館等2016）ことから、大学生による地域づくり活動についての研究成果は蓄積されつつあるものの、まだ発展途上の段階にあり、更なる知見の積み重ねが求められる。そこで本稿では、滝川市江部乙地域での地域活性化活動の取り組みを事例として、活動の詳細について述べたうえで大学生による地域活性化活動が地域に与えた効果を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

研究方法は、参与観察による事例研究、及び地域住民へのインタビュー調査である。筆者は江部乙地域での地域活性化活動を行うゼミナールの担当教員としてこの活動に関わってきた。学生との関わり方は学生たちの報告を聞いて、アドバイスすることや地域住民との仲介

³ ここでは地域にとって有用な変化について着目したが、上野山等（2020）では、学生にもたらされた変化としてさまざまな知識に加えて、他者と向き合い、地域と向き合うスキルや態度を身につける機会となったという教育的効果についても同時に明らかにしている。

を中心とし、実際の活動は学生が主体となって行っている。学生たちは週に一度、定例会を実施し、地域活性化活動の内容等について自ら企画し運営している。そうした関わりの中で学生が実施してきた地域活性化活動やそこから生じた変化について考察する。

また、地域住民に対しては、半構造化インタビューを実施し、「学生が地域づくりの活動に参加することで江部乙地域に生じた変化」について自由に話をしてもらった。対象者となったのは、主に後述する駅舎での活動をともに行っているまちづくりコミュニティ行動隊のメンバー、イベント参加者、ならびに江部乙地域の地域活動を支援する市役所の職員である。インタビューは筆者が2022年11月13日から12月8日までの期間に行った。場所は、まちづくりコミュニティ行動隊メンバー及びイベント参加者は江部乙駅舎で、市役所職員は市役所のオフィスで行った。

4. 滝川市江部乙地域の概要

江部乙地域⁴は、北海道空知管内滝川市北部に位置する地域であり、豊かな自然に恵まれた農村地帯である。明治27年に屯田兵村としてその歴史が始まり、もともとは滝川村のなかにあったが明治42年に分村し江部乙町となった。その後、昭和46年に滝川市と合併し現在に至っている。

江部乙地域は北海道内の大都市である札幌市と旭川市を結ぶ国道12号沿道にあり、国道12号を挟んで東側の丘陵地帯では、明治時代よりリングを中心とした果物の栽培が盛んに行われている他、主に菜種油の材料として栽培される菜の花は全国でもトップクラスの作付面積を誇る（図2）。また、国道12号線の西側には石狩川が走り、その周りは大きな水田地帯となっており、稲作が盛んな地域である。こうした広大な農地が生み出す景観は美しく、近年ではテレビCMやドラマの撮影地としても用いられている。

人口については、昭和33年がピークで10,194人、昭和46年に滝川市と合併する際の人口が7,570人、現在では3,259人と大きく人口が減少しているとともに高齢化率も59.0%となっており、人口減と高齢化が進んでいる。また、独居や家にこもりがちな高齢者が増えていることも課題となっている。

なお、本論文で取り上げる江部乙地域での地域活性化活動の中心は江部乙駅である（図3）。江部乙駅は函館本線の駅であり、2003年より無人駅となっている。現在ではだいぶ寂しくなってしまった駅前の商店街であるが、かつては映画館等もあり栄えた。また駅前の商店街には多くのリング問屋が点在し、背負子を背負った行商の女性たちが江部乙駅を拠点に

⁴ 本稿での江部乙地域とは滝川市に合併される以前の旧江部乙町を指す。

表1 江部乙地域の概要

区分	内容
人口	3,259人（令和2年10月1日末現在）
高齢化率	59.0%（令和2年10月1日現在） ※筆者計算
地理的特徴	東側は段差のある丘陵地，西側の石狩川沿いは平坦な水田地帯
おもな産業	水稲，菜の花，リンゴ など
主な観光資源	江部乙温泉，丸加高原，作付面積全国トップクラスの菜の花畑

出所：『令和3年版滝川市の統計』

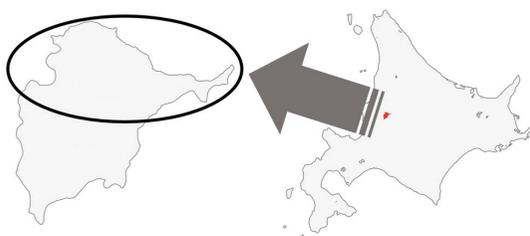


図1 江部乙地域の位置



図2 菜の花畑



図3 JR江部乙駅

留萌や旭川などにリンゴを売り歩いてきた。江部乙駅の看板にはリンゴのモチーフが描かれており、利用者は減少してしまっているものの江部乙駅は今でも多くの江部乙地域の住民の思い入れのある場所である。

5. 大学生による地域活性化活動に至った経緯

ここでは、國學院大學北海道短期大学部、舩井ゼミの大学生が江部乙地域での地域活性化活動を実施するに至った経緯について詳述する。

筆者が江部乙と関わりを持つようになったきっかけは「江部乙丘陵地ファンクラブ」（以

下、ファンクラブ)である。江部乙丘陵地ファンクラブは、私たちの故郷・江部乙を何とかしなければという思いをもった加藤氏、中島氏、大崎氏の3名が2006年に設立したもので、当初はフットパス⁵、自然観察会、写真展などの活動を通じ、江部乙の魅力を見出し、広い人に情報を発信し、地域内外の人たちを巻き込んで新しい動きを生み出してきた。そのなかでも特にフットパスの活動は特筆に値する。

ファンクラブでは丘の辺コース、山の辺コース、里山コースの3つのコースを設け、年に8~10回程度のフットパスを開催している(図4・5)。年間の参加者は多い年には200名を超えたこともあり、札幌などの地域外からの参加者も目立った。また、参加費の一部で用意されるお土産も好評で、地域の農産物などが提供されている。この活動は、お土産となる農産品を提供し、また農地を開放する農家をはじめ、トイレや休憩場所を提供する地域住民などを巻き込み、地域の情報発信や地域内外のネットワークを形成するなど地域づくりに大いに貢献した。

それらの活動が評価され、ファンクラブは2011年10月には第9回日本都市計画家協会『まちづくり大賞』を受賞した。その受賞を受けて北海道工業大学の久保勝裕教授とファンクラブが連名で日本都市計画学会の「社会連携交流組織」に応募し、まちづくり活動全般の助成金を得ることとなった。そして2012年に発足したのが「江部乙まちづくり協議会」(以下、協議会)である。

協議会は、ファンクラブのメンバーはもとより、江部乙地域の商工会青年部、農業関係者、観光事業者、一般住民など江部乙地域の住民、さらに行政と滝川市内の大学の関係者で



図4 春の菜の花フットパス



図5 秋の果物狩りフットパス

⁵ 日本フットパス協会の定義では、フットパスとはイギリスを発祥とする『森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径(こみち)【Path】』のこと、とある。

構成され、アドバイザーとして都市計画の専門家である久保勝裕教授、コンサルタント数名が加わり活動をスタートさせた。この協議会の設立の際に、当時ファンクラブの会長であった中島氏から声がかかり、筆者も協議会のメンバーとして加わったことが江部乙地域での活動の契機となった。

協議会では、講師を招いた連続セミナー、先進地事例としての東川町視察、北海道工業大学久保研究室の学生と舛井ゼミの学生が共同で実施した「合同まち歩き」など盛んに活動が行われた（図6）。しかし、社会連携交流組織として助成を受けられたのは2年間であり、2014年には、協議会はその役目を終え、協議会の活動は「まちづくりコミュニティ行動隊」（以下、まちコミ隊）に受け継がれることとなった。

まちコミ隊では、協議会で検討された地域づくりを実行するにあたり、活動の拠点をどこに設けるかという議論があったが、江部乙駅がかつてリングという文化の発信拠点だったこと、また多くの住民にとって思い入れの深いということから活動拠点となった。その際、駅を使って一日限定のカフェを経営したり、地域づくりのイベントなどを開催してみたいという学生が現れたので、その学生たちと江部乙駅を視察することとした。それまでは教員である筆者が協議会のメンバーとして活動をしていたが、ここでようやく舛井ゼミとしての活動が始まることとなった。

舛井ゼミでは、まず駅舎の清掃から行うこととした（図7）。それは活動を始めるにあたり駅舎の視察に行った際にひどく汚れていたこともあるが、何よりも多くの地域住民にも清掃に参加して頂き、そこで地域づくりに繋がっていくようなコミュニティをつくりたいという思いがあったからである。毎月第二土曜日の午後に駅舎の清掃をすることとしたが、幸いにもこの活動は今年度で9年間続く活動となっている（2022年12月現在）。



図6 北海道工業大学（現、北海道科学大学）久保研究室との合同まち歩き



図7 駅舎清掃

6. 大学生による江部乙地域における活動の概要

上述したように、学生が江部乙地域での活動を始めたのは2013年である。ゼミ教育の一環として主に週末を利用して行っているものであるが、ゼミの地域活動では、経営学教育の一環として株式会社を模した事業部制の組織体制で行っている（図8）。具体的には、江部乙地域の活性化活動を行う江部乙事業部、滝川市をビジネスを通じて活性化する活動を行うビジネス事業部、砂川市の活性化活動を行う砂川事業部の3つの事業部があり、それらの事業部をゼミ長・副ゼミ長、3人の事業部長がメンバーとなる幹部会が管轄するという仕組みである。教員は、それらの組織体制の外部にあり、アドバイスや活動のフィードバック、地域住民や行政との仲介などの役割を担っているだけで、地域活動については学生が主体となって行っている。それぞれの事業部には学生が10～15名ほど所属し、2年生が務める事業部長のもと、各事業部で地域活動を企画運営している。各事業部では、週に一度「定例会」という学生だけが参加するミーティングがあり、企画の検討や運営の進捗状況の確認等を行っている⁶。ゼミ長、副ゼミ長、各事業部長による「幹部会」は毎週行われており、各事業部の活動内容の調整、ゼミでの地域活動全体に関わる事項について議論、意思決定している。さらに、月に一度、ゼミに所属する全ての学生が参加する「全体ミーティング」があり、事業部間の情報やノウハウの共有を図るための各事業部の月間活動報告、ゼミ全体での課題解決のための議論、所属学生のモチベーションを高めるための月間MVP表彰などを行っている。

上記のような仕組みのなかで、本稿で取り上げる江部乙事業部は江部乙地域の活性化に向けたさまざまな活動を行っている。江部乙事業部は活動を開始した経緯で紹介した江部乙駅舎清掃を開始した2年後の2015年に活動を開始し、現在まで8年間継続している。今年度、所属している学生は18名⁷（2022年12月現在）で1年生が10名、2年生が8名である。毎週、火曜日の授業終了後に定例会を実施し、主に週末を利用して一月に2～3回の地域づくり活

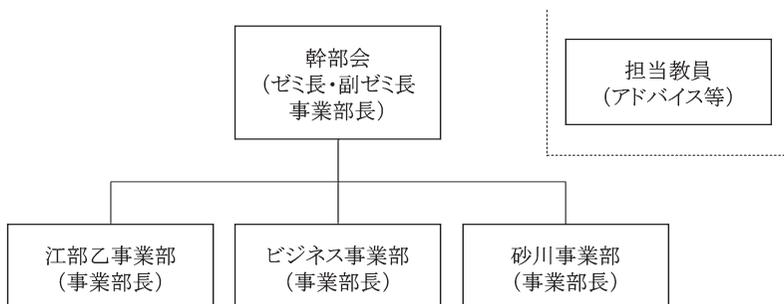


図8 ゼミの地域活動運営体制

⁶ イベント時など人手が必要なケースでは、他の事業部の学生に呼びかけ参加することもある。

⁷ 今年度に限り所属学生が多い状況であるが、例年だと15名程度である。

動を行っている。以下では、江部乙事業部が行ってきた江部乙地域での地域づくり活動についてその概要を記す。

(1) 江部乙駅舎清掃

大学生が江部乙地域での活動をするうえで最も根幹となっているのが駅舎清掃である。この活動は2013年に始まり9年間にわたって継続して行われている。もちろん駅舎そのものの美観を保つこともその目的の一つではあるが、最も重要な目的は、地域住民に多く参加して頂き、共に清掃の作業を行うことで駅舎ひいては地域そのものの愛着を深め、また、地域住民と学生たちがコミュニケーションを続けるなかで地域づくりにつながっていくコミュニティをつくることである。

駅舎清掃は毎月第二土曜日に行われ、駅舎のみではなく駅のホームや跨線橋、駅舎前の一帯を清掃している。豪雪地帯であることもあり、冬季には駅舎の階段やその周辺の雪かきも行い利用者の安全も図っている。当該活動は幸いにも、まちコミ隊をはじめとした地域住民との協働で継続的に実施されており、地域活性化のコミュニティを拡げることができた一方、近年では参加メンバーの固定化という課題もあり、より一層コミュニティを拡げる努力が求められている。

(2) 駅カフェにおける企画とその運営

駅カフェ⁸とは、地域住民が江部乙駅舎にて交流することを目的としたイベントであり、毎月第二日曜日に行われている。駅カフェでは、地域の商店が提供するパンやコーヒーなどの軽食を提供する一方で、高齢者向けの健康体操や健康情報の提供、朗読会、弾き語りなど地域住民向けの催し物、クリスマスリースづくりや紙袋で制作するランタンづくりなどのワークショップ、および学生が企画運営する小イベントなどが行われている。江部乙地域では高齢化が進んでいるということもあり高齢者の来場が多いが、毎月平均すると60～70人程度が来場し、普段は人気の少ない無人駅が賑わいを見せ、住民同士あるいは住民と学生とで交流を楽しんでいる（図9、10、11）。

駅カフェを主催しているのは、地域住民から成るまちコミ隊である。学生はまちコミ隊が主催するイベントの企画の一部を自ら企画・運営することや準備、片付け、ワークショップの企画・運営ならびに来場者とのコミュニケーションをとること等がその役割である。駅カ

⁸ なお、この江部乙駅カフェは、2017年から3年間、社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団の認知症カフェ開設応援助成の認定を受けて活動を行っていた。



図9 駅カフェ



図10 駅カフェにて学生が企画したハロウィンイベント

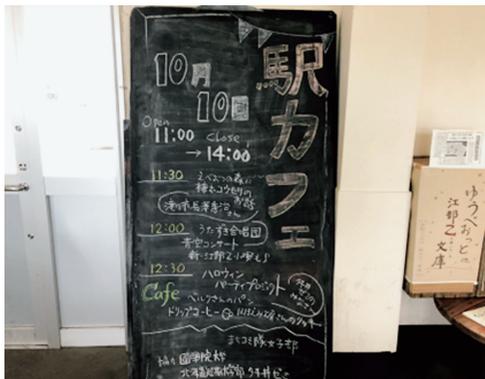


図11 駅カフェの実施内容例

フェでは、一回あたりに概ね2つの催し物と1つのワークショップが行われることが多い。これらの催し物やワークショップについては、江部乙地域の住民、あるいはその知人、関係者ならびに学生などが月替わりで行っている。つまり、この駅カフェというイベントそのものが多くの関係者の参加するプラットフォームとなっている。プラットフォームとは、多様な主体が協働する際に、協働を促進するコミュニケーションの基盤と

なる道具や仕組みのことである（国領等2011）⁹。学生は、まちコミ隊を中心とした地域住民とコミュニケーションをとりながら駅カフェというプラットフォームで協働を行っているのである。

具体的に学生が駅カフェで行っていることは、子どもたちがハロウィンの衣装を着て商店街を練り歩くハロウィン・商店街スタンプラリーなどの小イベントをはじめ、学生のふるさとをスライド等を使って紹介するふるさと紹介、マジックショーなどのステージ企画、七夕の短冊づくりや紙袋ランタン制作のワークショップ、ならびに主に子どもたち向けのかき氷や飲み物などの飲食の提供などである。また、毎回積極的に地域住民とのコミュニケー

⁹ 地域づくり、観光まちづくり分野でのプラットフォームについて詳しくは、飯盛（2015）、飯盛編（2021）、森重（2014）を参照されたい。

ションをとり、地域理解や地域課題の発見等に努めている。

上記のように、この駅カフェはプラットフォームとしてさまざまな関係者が協働する基盤となっており、この駅カフェから江部乙地域で実施している認知症カフェ「ひだまり」や地域食堂の「おためし食堂」など地域住民による新たな活動が生まれている。

(3) 江部乙地域におけるさまざまな会議体への参加

学生は江部乙地域における地域活動に多く参加していることもあり、地域のさまざまな計画立案のワークショップや勉強会にも参加している。2018年には、市内の公共施設マネジメントの観点から、江部乙地域にある公共施設「農村環境改善センター」の改装工事が計画された。これは改装にあたり「農村環境改善センター」と「江部乙地区コミュニティセンター」の機能を集約し、新たな農村環境改善センター像をつくりあげるものであり、そのための第一歩として地域懇談会が実施され、筆者だけでなく3人の学生もそのメンバーに選出された。

学生は5回の懇談会の全てに参加し、江部乙支所機能、児童館機能、市民活動の場、「ハレ」の場という従来の機能に加えて、住民交流の場、地域情報の発信などの新たな機能を打ち出すことに貢献した。

なお、新農村環境改善センターの完成後、コロナ禍の影響もあり利用者の増加は見られないものの利用の質が向上している。つまり、具体的には、1階部分に「集いの場」というスペースが新たに完成し、ここで地域住民の交流が少しずつ生まれているのだが、交流しやすくなった新農村環境改善センターを拠点に江部乙地域で市民活動を行っている団体が共に学び、活動する「えべおつ市民大学 乙なカレッジ」（以下、乙カレ）という活動がスタートしているのである。乙カレはもちろん本当の大学ではなくあくまでも地域でのさまざまな活動を大学での活動のように学び、楽しみたいというコンセプトから「大学」という名称がつけられている。乙カレには、主にまちコミ隊、國學院大學北海道短期大学部舛井ゼミ、ファンクラブ、NPO法人岩橋ふるさと北辰振興会、江部乙商工会など江部乙地域に関わる多くの団体および地域住民が参加しており、教養学部では江部乙の「ヒト・コト・モノ」を学び、交流する、ならびにまちづくり学部ではこれからの江部乙を考え、行動につなげることを目的に活動を行っている。

2022年11月には、乙カレまちづくり学部講演として観光ビジネス総研代表取締役利根浩志氏を迎え、観光ビジネスにおける江部乙の将来像という講演会が開催された。その後、12月には江部乙地域の魅力を再発見するための第1回目のワークショップが開催され、学生も参加し新たな活動に向けて学びを得ている。

(4) 江部乙丘陵地フットパスでの活動

江部乙地域には丘陵地を中心として3つのフットパスコースがある。このフットパスコースは北海道新聞社創刊70周年事業として企画された「ほっかいどう100の道」や地球の歩き方が選んだフットパス・ベストコースにも選ばれるなどフットパス・コースとして優れていることはもとより、この活動は先述したように、日本都市計画家協会『まちづくり大賞』を受賞するなど、地域づくりにおいても大きな成果を残している。その一方で、ファンクラブが実施するこのフットパス事業は、ファンクラブのメンバーや参加者の高齢化に伴い、コースの短縮化、マンネリ化などの課題が表面化している。

そこで、学生ならではの視点でフットパス事業の課題を解決することは出来ないかという思いから学生によるフットパスの活動が始まっている。現段階では、フットパスに参加し、ガイドを受けながら地域理解やフットパスの勉強をしている段階ではあるが、将来的には江部乙のフットパスの魅力の発信や若者をターゲットにした新たなフットパスコースの作成など、地域の魅力の再発見や情報発信などの活動をしていこうと考えている。そのために、学生たちのグループがフットパスを用いて地域づくりを行っている他地域の事例調査などを始めている。

(5) 道の駅プロジェクト

道の駅プロジェクトは、今年度から始まった新たな活動であり、現段階ではその目標などが明確に決まっているものではないが、若者としての大学生の視点から道の駅、その中でも主に農産物直売所の改善などを行おうとするものである。道の駅たきかわは国道12号線沿いの江部乙地域の中心部分にあり、江部乙地域の外部との交流拠点としての機能が期待される。この活動は道の駅たきかわを運営する事業会社およびそれを担当する市の担当者からの声掛けで始まったものであるが、6月には道の駅の基本情報、農産物直売所などの売り場の説明、および滝川市の特産品の概要説明を受け、その後数回のミーティングを経て10月以降から本格的な現地調査を行っている段階である(図12)。



図12 道の駅での調査

7. 考察

ここからは、半構造化インタビューの結果と参与観察の結果得られた事実に基づいて江部乙地域における学生の地域活性化活動が地域に与える効果についての考察を行う。その結果、5つの効果があることが確認された。以下、順に説明する。

(1) 地域住民の地域活性化活動へのモチベーションを高める効果

地域住民の地域活性化活動に対するモチベーションを高める効果とは、地域活性化活動を行っている住民と学生が共に協働することにより、そのモチベーションが高まり、活動が維持されたり、活動レベルが向上する効果である。

江部乙地域では、駅舎清掃や駅カフェの活動に学生が長期間関わり、その関わりの中で交わされたコミュニケーション、および学生が参加することで駅カフェ等のイベントに来場する住民が満足している様子を見ることによって、まちコミ隊をはじめとする地域活性化活動を行うメンバーのモチベーションが向上していることがうかがえる。以下はその効果を示す発話の一例である。

学生さんたちが参加してくれることによって本当に活気づいたというか。それで駅の清掃もとてもありがたいですけども、駅カフェは必ず来てくださる人がいますよね。学生さんたちが来てくれることによって凄く場が明るくて、活気があってというので、学生さんたちに会いたくて来る人もどんどん出てきてるっていうのが確実にわかります。私たち自身もすごく気持ちが何て言うのかな？フレッシュになるっていうのかな。若い人たち見てると嬉しくなる。そういう意味ですごい相乗効果というかな、何といっても感謝してます。【まちコミ隊、女性】

自分は立場が立場っていうこともあるんですが、何か新しいことを起こそうと思った時に、一緒にやれるんじゃないかという可能性を感じるわけです。【職員、男性】

(2) 地域住民をエンパワーし、コミュニケーションを活性化させる効果

地域住民をエンパワーし、コミュニケーションを活性化させる効果とは、地域住民が学生と触れ合うことによって活力を得る、そして地域住民同士のコミュニケーションが活性化される効果である。特に少子高齢化が進む江部乙地域においては、高齢者や小中学生にとって大学生と話をすること自体が喜びや楽しさを伴う非日常的な体験である。また、地域のことを

良く知らない未熟な存在である学生に対して「色々と教えてあげたい」と考え、自らの経験や知識などを学生に伝え、それを聞いてもらえるという経験も地域住民をエンパワーすることになる。さらに、駅カフェでは、地域住民とまちコミ隊のメンバーだけではコミュニケーションがうまくいかないようなケースでも、学生が間に入ることによってコミュニケーションが円滑になる様子がみられた。以下はその効果を示す発話の一例である。なお、発話の中のカッコ書きは筆者が文脈を理解しやすいように書き加えたものである（以下同じ）。

地域の人もやっぱり学生が来る、いるのと、いないのとでは顔つきが違うんですね。そう、私たちと話をする時は、やっぱりなんか現実味のある話をしてるんですけど、学生と話するときって、なんかねすごいほがらかな顔でお話してるので、見ると本当ほっとしますね。やっぱり学生たちと話すると、そんな感じかな。【まちコミ隊, 女性】

高齢者しかいないんですよ。若い人とはまず会わないので、この駅カフェは國學院の学生さん来てくれるので、若い子とも話ができて、高齢者さんも元気になるなと思いますね、大体老人クラブだったり、老人は老人としか会わない。家族の話ができて、話を聞いてくれて。一人でいるお年寄りの所にちゃんと気が付いて、学生が行ってくれるんで。本当になんか、また来たくなる場だなという風ね。高齢者の皆さんにとっては、こんないいところはないんじゃないかと私はやっぱり思います。【まちコミ隊, 女性】

(大学生は)一番いない世代だから。言ってしまうえば、見たことない世代だから。子供たちが、みんなお姉さんお兄さん、かっこよくて可愛くてさ、おしゃれで、そんな人見たことないからね。なんかさ、ピアスしてね。きつと、そういうお姉さんたちがすごく親身になっていうか、すごく近いところで「何ちゃんさあ」とかって言ってくれるのが、もう嬉しくてしかたない。やっぱ、それはこの子供たちに新しい発見というか。刺激を与えてくれてなんて言うんだらう？自分のすごい身近な将来こうなるんだっていう、目標というか、こういう風になりたいなっていう。憧れにはなっていると。【市職員, 女性】

いつか学生さんたちが来れなかった日があって、たまたま来たときに私が一所懸命話し相手しても3分で帰られました。【まちコミ隊, 女性】

(3) 地域ネットワーク内外における連結環としての効果

地域ネットワーク内外における連結環としての効果とは、地域の内外で地域活性化活動を行うプレイヤーと利害関係を持たない学生がハブになることでプレイヤー同士がつながる効果である。

江部乙地域では、その活動の初期段階では、学生が駅舎を清掃する際に様々な地域住民の力を借りて実施していた。その際にできたネットワークによって江部乙地域内での新たなつながりが生まれていることが観察できた。以下はその効果を示す発話の一例である。

なかなかそこ（江部乙地域で活動している団体や人とその他の団体や人）が線として繋がってってくれないっていうのがあって、この間の観光ビジネスの話（地域の各団体が参加した観光ビジネスについての講演会）もそうだけでも、やっぱり、地元の地域の人が動かないことには、動いて結んでいかないとやっぱり発展していかない。元気になっていかないっていうのがあるんでしょう？だから、今のところ、その駅カフェっていうのは学生がそのハブ的なことをしてくれて、元気を少し分けてくれてる。その1歩先にもやっぱり、学生もそうだけど、私らだけじゃなくって、地域の人たちが入り込んでくれないと。なかなか理想ばかりになっちゃうかなって。【まちコミ隊、女性】

今まではまちコミ隊、國學院の学生たちの接点っていうのが、そこだけだったのがどんどん広がって。で、そのあと、あのバス停で塗装、絵描いてじゃないですか？青いやつね。あの時は今度、商工会とゆにこみゅーん（舛井ゼミとは異なる大学生によるNPO）が繋がって。だから、いろんなところに今学生が少しずつこ入って。駅からどんどんどんこう学生たちも広がってって。みんなやっぱり学生がこうはまることによって非常に幸せをもらってる感じがします。【市職員、女性】

(4) よそ者の新たな視点を地域にもたらす効果

よそ者の新たな視点を地域に持ち込む効果とは、地域にとってはよそ者である大学生が地域住民との協働やコミュニケーションを通じて地域住民の日常的な視点とは異なる新たな視点や知識を地域にもたらす効果である。若い大学生だからこそできることや地域住民にはない知識があるかもしれない。また、地域住民にとっては当たり前の光景、日常的な行為だったとしても、視点の異なる大学生からは新しく魅力的なものに映ることもある。そうした発

見を地域住民に伝えることによって、新たな方法、取組みないし、新たな地域資源の発見や地域住民の地域愛着の向上につながることもある。

江部乙地域での活動に関わっている大学生は東京圏の一都三県を出身とする学生が多く、特に北海道の農村地区は非常に新鮮なものとしてその目に映っていると思われる。駅カフェにおける学生の企画などは地域住民では思いつかないものも多く、地域の魅力の再発見や新たな試みに繋がる効果を見せている。例えば、ハロウィンの季節に行っている商店街スタンプリーでは、地域の子供たちが仮装をして各商店を巡り、商店主からお菓子屋スタンプをもらう簡易的なまち歩きなのだが、子どもたちやその親にとっても商店の新たな魅力に気づく機会となっている。仮装をして商店街を練り歩くという企画は地域住民だけでは実現しなかっただろう。以下はその効果を示す発話の一例である。

自分たちのとこの魅力に気づいてないってうのもあるので、本当に外から来た人たちが新しい視点で、これがいいねみたいなのを見つけて、じゃあ、それをちょっと何かやってみようかっていう思いになれるっていうのは、やっぱり学生さんならではと思います。【職員、男性】

やっぱりそこ（地域内）ですと地域の今までの人たちで話をしても、多分先に絶対進まない。学生がここに入ることによって、おそらく私たちが気がつかないところを、色々アイデアがあったり、色々ね私たちが使えない色々な機器とかもさ、自由に使えるじゃない？江部乙の地域の人たちは今までの知恵とかいろんなこと、知識とかはすごく豊富にあるから。それがガシャンと一緒にあった時になんか生まれるんじゃない？っていう期待がすごく今あるんですよ。【市職員、女性】

(5) 新たな地域活性化の活動が生まれる効果

新たな地域活性化の活動が生まれる効果とは、大学生が地域と関わりを持つことによって、地域住民と大学生が相互に何らかの影響を与え合い、新たな地域活性化に向けた活動が生まれることである。

江部乙地域では、大学生が駅舎清掃を始めたことを契機に様々な関係者が関わり合いを持ち始めた。そのような中で、せっかく毎月駅舎を清掃しているのだからその綺麗になった駅舎を使ってイベントをしようと考えたまちコミ隊のメンバーのアイデアから駅カフェという地域イベントが生まれた。その駅カフェには大学生も加わり、地域活動のプラットフォームの一つとなってさまざまな関係者が関わり合い、そこからまた新たな活動も生まれている。

そうした契機となったのは大学生が始めた駅舎清掃であった。その他にも、地域で活動する大学生とともに地域課題を解決しようと、フットパスや道の駅で新たな活動が生まれようとしている。以下はその効果を示す発話の一例である。

立ち上げたはいいけども、その場所がないって。建物を借りるにしてもお金がかかるじゃないですか？家賃だけじゃなくて、必要経費、水道代、電気代、色々諸々かかるでしょ。で、何にもお金も何にもないのに、そういうことはできないわねって言ってたの。その話をしてる時に学生と地域の人がここをまちコミ隊、男性の人もそうだけでも清掃するようになったじゃないですか？駅舎を。そういえばさって、学生さんって月に1回、駅舎さ。地域の人からももの借りて清掃してるんだよねって話になって、そしたら、駅使ったらいいんじゃないって。メンバーの中の1人が言い出したのさ。駅でやればいいじゃん。【まちコミ隊、女性】

ここを使うきっかけはやっぱり学生の清掃。まちづくり研究会、あの3年間の活動があり、そして、そのその後のまちコミ隊の活動が2年ぐらいあり、それがくすぶって、これじゃいかんっていうことでくすで、女子が立ち上がったっていうのが、流れです。【まちコミ隊、女性】

ここでは、大学生が地域と協働で地域活性化活動をすることによって地域住民の地域づくり活動へのモチベーションを高める効果、地域住民をエンパワーしコミュニケーションを活性化させる効果、地域ネットワーク内外における連結環としての効果、よそ者の新たな視点を地域にもたらす効果、そして新たな地域づくりの活動が生まれる効果の5つの効果があることが確認できた。

その5つの効果を発揮することができたのはどうしてだろうか。ここで留意すべき点は、ただ大学生が地域住民と協働すれば同様の効果を得られることができるであろうかということである。学生たちは、毎月開催される駅舎清掃や駅カフェなどの定期的な事業はもちろん、その他にも地域のお祭りやイベントにも参加し続けてきた。また、参加した際には積極的に地域住民とのコミュニケーションをとってきた。その結果、多くの学生は地域住民との顔見知りの関係になっており、一部の学生に関しては地域住民とは信頼関係を結ぶ所まで関係が構築されている。卒業後もSNSを通じて連絡を取り続けている学生もいる。認知症カフェにおける大学生のインターンシップをとりあげた上野山（2016）でも、継続的にカフェに関わる機会を得て、信頼関係とは言えなくとも顔見知りの関係になったことが成果を導出

できた大きな要因となったと述べている。地域における協働において大学生の効果を効果的に発揮させるためには、信頼関係をどのように築いていくのが重要な論点となる。

また、上記のような関係性を築いていく際には受け入れる側の地域住民の姿勢も重要になる。つまり、スキルも地域に対する理解もないよそ者である大学生を排除せずに寛容する一方で、大学生の全てを受け入れて受け身になるのではなく、地域づくりを協働で行う対等の立場として扱うという姿勢である。江部乙地域では、大学生の活動に対して寛容で支持的な姿勢で受け入れてきた。一方で、地域理解が少ないことや未熟な点が原因となって企画の内容や運営の方法に問題がある場合にはそれを指摘し、修正を求め、お互いに納得のできる形で物事を進めてきた。

このように、大学生が地域住民と協働することで効果を発揮するためには、信頼関係、ないし顔見知りの関係になるような関係性の構築、さらに受け入れる側の地域住民の姿勢としては、寛容的でありながらも受け身にならずに大学生を地域活性化活動を協働で行う相手として対等に扱うことが求められる。

8. まとめ

江部乙地域では、大学生と9年間にわたって地域活性化に向けた協働を試行錯誤しながら続けてきた。その中で、大学生が地域活性化活動を行うことにより、地域住民の地域づくり活動へのモチベーションを高める効果、地域住民をエンパワーし、コミュニケーションを活性化させる効果、地域ネットワーク内外における連結環としての効果、よそ者の新たな視点を地域にもたらす効果、そして新たな地域づくりの活動が生まれる効果の5つの効果があることが確認できた。

また、それらの効果を生み出すために、大学生は地域住民と信頼関係を構築していくことが、地域住民は大学生に対して寛容的でありながらも協働相手として対応に扱っていくことが重要であることを明らかにしてきた。

しかし、課題もある。まずは、インタビューに関しても江部乙地域の活動に関わっている地域住民の声を十分に拾い集めることができていない可能性がある。もっと多くの関係者からインタビューデータを集める必要がある。また、大学生の地域活性化活動が地域に与える効果についてはある程度明らかにできたと考えているが、なぜそのような効果が生じるのか、そのメカニズムについての検討は不十分である。

それらの点については、今後さらなる研究を続けていく必要がある。

謝辞

江部乙地域で活動されている団体、住民の皆様、滝川市役所の関係所管の皆様には、本取り組みに対する多大なるご支援を頂き、誠に感謝しております。記して感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 飯盛義徳, 2015, 『地域づくりのプラットフォーム：つながりをつくり, 創発をうむ仕組みづくり』, 学芸出版社
- 飯盛義徳編, 2021, 『場づくりから始める地域づくり：創発を生むプラットフォームのつくり方』, 学芸出版社
- 上野山裕士, 2016, 「認知症カフェにおける世代間交流：地域インターンシップ・プログラムでの実践を事例に」, 観光学Vol.14, pp33-47.
- 上野山裕士, 2020, 「地域活性化に向けた地域と学生の協働的实践の成果と課題：広川町津木地区における6年間の取り組み事例から」, 観光学Vol.23, pp67-76.
- 小川尚紀, 2018, 「岐阜県大垣市における中心市街地活性化政策と岐阜経済大学まちなか共同研究室マイスター倶楽部の歩み」, 地域経済Vol37, pp51-62.
- 国領二郎・プラットフォームデザイン・ラボ編, 2011, 『創発経営のプラットフォーム』, 日本経済新聞社
- 鈴木 誠, 2004, 『大学と地域のまちづくり宣言—岐阜経済大学マイスター倶楽部の挑戦』, 自治体研究社
- 地球の歩き方編集室, 2010, 『フットパス・ベストコース 北海道 I (地球の歩き方BOOKS)』, ダイアモンド社
- 中央教育審議会, 2012, 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』
- 友寄俊秀, 2001, 「まちの定点観測で見えてきたこと」, 都市住宅学Vol.34, pp35-38.
- 友寄俊秀, 2002, 『商店街は学びのキャンパス—現場に学ぶまちづくり総合政策学への招待まちかど研究室「ほんまちラボ」からの発信』, 関西学院大学出版会
- 中塚雅也, 小田切徳美, 2016, 「大学連携の実態と課題」, 農村計画学会誌Vol.35, No.1, pp6-11.
- 日本フットパス協会, 「フットパスとは」, <https://www.japan-footpath.jp/about.html> (最終アクセス：2023/01/05)
- 古川尚幸, 2011, 「大学生による地域活性化に向けた取り組みとその教育効果 ～「香川大学直島地域活性化プロジェクト」を事例にして～」, 香川大学経済論叢Vol.83, No.4, pp173-194.
- 北海道新聞社編, 2013, 『ほっかいどう100の道』, 北海道新聞社
- 舛井雄一, 2019, 「大学生参加型の「域学連携」まちづくり(3)」國學院大學北海道短期大学部紀要Vol.36, pp15-28.
- 水野晶夫, 2004, 「学生主体のまちづくり活動の教育的活用と課題—名古屋学院大学マイルポスト・プロジェクトを事例として」, 都市問題Vol95, No.4, pp19-26.
- 溝上慎一・成田秀夫編著, 2016, 『アクティブラーニングとしてのPBLと探求的な学習』
- 森重昌之, 2014, 『観光による地域社会の再生—オープン・プラットフォームの形成に向けて』, 現代図書